

【事例7】

親戚宅にて作動中の加湿器を見付けてつかまり立ちをしようとし、蒸気の出る部分に手を置いてしまってやけどした。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成 25 年 12 月、1歳、要入院)

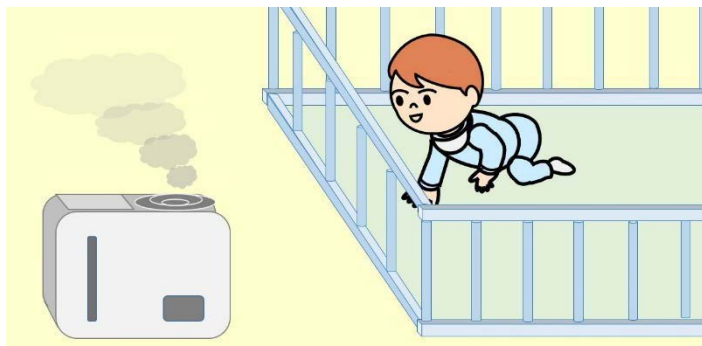
【事例8】

キッチンカウンターの上に置かれていた加湿器の、垂れ下がっていたコードを引っ張ってしまったようで、加湿器が落下した。加湿器のお湯をかぶってしまい、左大腿部熱傷・前胸部にⅠ度熱傷、左上肢にⅡ度熱傷。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成 28 年2月、0歳、軽症)

<事故を防ぐための注意点>

- 加湿器は様々なタイプがあり、タンクでお湯を沸かして高温の蒸気を出すタイプの加湿器では、倒して熱湯をかぶったり、蒸気に興味を引かれて吹出し口に触ってしまったりしてやけどをすることがあります。こういったタイプの加湿器を使用する際には、ベビーゲートを利用するなどして、加湿器に手を伸ばした子供が触れないようにしましょう。



- 子供がコードを引っ張ったり、コードに引っかかったりして加湿器を倒すことがないように、コードの取扱いに注意しましょう。

(4) 湯たんぽやあんか

湯たんぽやあんかに関する事故情報は 14 件寄せられており、このうち1件は入院治療を要した事故です。

事故の内容はほとんどがやけど(13 件)で、中でも多かった事故の要因として、低温やけどとお湯漏れによるやけどがそれぞれ4件ずつありました。

低温やけどは、暖かく感じる程度のさほど高温ではない温度でも、長時間皮膚が接することで、それほど熱いと自覚しないままやけどになってしまうものです。低温やけどは普通のやけどに比べて痛みが少なく、水ぶくれなどもできにくく、乾燥していることが多いため、一見軽そうに見えますが、長時間熱の作用が及んだために、深いやけどになってい

ることも珍しくありません⁴。特に、子供は大人に比べて皮膚が薄いので、重症化しやすいと考えられます。

【事例9】

就寝時に下腿に湯たんぽを使用したところ、翌朝に水疱びらんが生じた。低温やけどでⅡ度の熱傷。

(医療機関ネットワーク、受診年月：平成 28 年2月、5歳、要通院)

【事例10】

クレーンゲームで取った湯たんぽにお湯を入れて孫が寝るときに使ってみた。しばらくすると蓋が緩みお湯が漏れ、孫のお腹にお湯が掛かり軽いやけどをしてしまった。

(事故情報データベース、発生年月：平成 27 年3月、1歳、軽症)

<事故を防ぐための注意点>

- 低温やけどを防ぐためには、長時間同じ場所を温めないことが重要です。皮膚が損傷を受ける温度と時間の目安は、44℃では3～4時間、46℃では30分～1時間、⁵50℃では2～3分です⁵。大人に比べて皮膚の薄い子供はより一層の注意が必要になります。
- 湯たんぽやあんか等を使用する場合は、製品の使用上の注意をよく読みましょう。特に就寝時には、布団が暖まったら湯たんぽやあんかは布団から出すようにしましょう。
- 湯たんぽを使用する前に、お湯漏れしないことをしっかり確認しましょう。

3・終わりに

事故の中には、自宅ではなく祖父母宅などの、環境が通常とは異なる外出先で発生したものもありました。自宅では使用しておらず使い慣れていない製品の危険性については、保護者にとっても認識しづらいものです。また、子供は好奇心が旺盛で、見たことのない製品があれば触りたがることも考えられます。お正月の帰省等で自宅以外に滞在することが増える時期でもありますので、特に注意しましょう。

<本件に関する問合せ先> 消費者庁消費者安全課 岡崎、石井
TEL:03(3507)9137(直通)
FAX:03(3507)9290
URL:<http://www.caa.go.jp/>

⁴ 出典：「家庭の医学(第六版)」株式会社保健同人社

⁵ 参考文献：「低温やけどについて」山田幸生「製品と安全」(第72号、平成11年3月)製品安全協会

< 参考1 > 子供のやけどと応急処置について

京都第一赤十字病院 救急科 安 炳文 医師

子供のやけどは特に0歳から1歳までで多く、これらの年齢では、どんな物が熱いのか、まだよく分からないままに触れてしまい、やけどに至ることがあります。事故を防ぐためには、とにかくやけどの原因となる物に触ることができないような環境作り(手の届かない場所に置く、柵で囲むなど)が大切です。

万が一やけどをした場合、これ以上熱が広がらないよう、すぐに流水で十分に冷やすことが応急段階では大変重要になります。冷やす際のポイントは以下のとおりです。

- ・水道水やシャワーなどの流水で、やけどした部分を15分～20分間冷やしましょう。
- ・着衣の上から熱湯を浴びた場合は無理に脱ごうとせず、衣服を着たまま冷やしましょう。
- ・やけどが広範囲で全身に流水を掛けるような場合には、低体温に注意しましょう。
- ・市販されている冷えるシートでは、やけどは十分に冷えない可能性があります。また、傷害面に直接シートを貼ることで皮膚障害が生じることもあります。
- ・凍ったもので冷やすと凍傷のおそれがあるので、直接冷やすのは避けましょう。

やけどが片足、片腕以上の広範囲にわたる場合は、救急車を呼ぶか、至急病院へ行きましょう。水ぶくれの場合は、潰さないようにして、形成外科や皮膚科を受診しましょう。なお、病院を受診する場合にも、まず冷やしてから病院に向かいましょう。

低温やけどは水で冷やしても効果はありません。見た目より重症の場合がありますので、症状が悪化したり、子供が痛がるが続いたりなどした場合には医療機関を受診しましょう。

普段、気を付けて事故の防止がきちんとできている御家庭でも、住環境が変わることで事故が起こってしまうことがあります。帰省や旅行など、通常とは異なる環境で過ごす際には、より一層の注意が必要になります。

<参考2> 子どもを事故から守る！プロジェクト

消費者庁では、「子どもを事故から守る！」ための様々な取組を行う「プロジェクト」を集中的に実施しています。



<http://www.caa.go.jp/kodomo/>

取り組みの一つ、メール配信サービス「子ども安全メール from 消費者庁」では、主に0歳～小学校入学前の子どもの思わぬ事故を防ぐための注意点や豆知識を、毎週木曜日にお届けしています。携帯及びパソコンで、情報提供していますので、お子様の事故を予防するために、是非ご活用ください。

<http://www.caa.go.jp/kodomo/mail/index.php>